



発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第四十八号（一日発行）  
平成五年九月一日

# 北海の古平風土物語（十四）

鉄砲名人・館岡重助のこと 下

高橋 源 五口

下屋おろしの造作は、十月の末に終わった。

やがて雪が降りだし、雪が積もるころになっても、雪が積もんだか名人の「鴨コ鍋」の音さはさっぱりなかった。

「ほっぺアもげでまるで（おちてしまふ）」と、おどかさされたが、おかげでか二人のほっぺはもげててしまふこともなくてすんだ。

× × ×  
翌春、三月はじめ雪が固くしまりかけてきたころのことである。名人の棟梁と、家のおやじ（故・小野寺源太郎）と、ガロ（ガロの沢）のおやじ（故・平三郎）の鉄砲打ちの三人組が磨きたての愛銃と、腰には銃弾を

刺し並べた帯革（たいかく）をし、真つ黒な鉄の虎挟みと、のこ・なた・まさかり・山刀などを取りまとめ、特別大きな五合の焼き握り飯、食糧の入った荷物をけら（みの）の上から背負い、かんじきを腰に着け、けえすき（木製の雪かき）を突きながら、雪の深い古平の奥の山に入って行った。

それから三日後の午後のことであった。三人の名人たちは、古宇郡界の沢で熊の穴を見つけた。斜面の老木の根方にあつたという。トド松の枝を積んでそれに火をつけ、いぶり出しをかけて、熊が穴から出てきたところを名人棟梁が愛銃で仕留めたとのこと

であった。そしてその大熊を山ぞりに積んで下りてきた。泥の木衆の三、四人もそり引きを手伝って、威勢よく帰って来たのである。正月の初荷を運んでくるような勢いであつた。名人たちの鼻息は荒く、元氣旺盛で、まるで凱旋將軍にも似た。けら將軍、たちであつた。

これは五才の雄熊であつた。吊り下げた体長は六、七尺（二ヤコ内外）ほどもある大きなものであつた。泥の木衆は手慣れた手さばきで皮をはぎ、臍物や血、肉を取り分ける。家の前の真つ白だった雪は、大熊の鮮血で真つ赤に染まつた。

こうして大勢の見守る中で、獲物の始末は夕方近くになつて終わり、それから、いよいよ熊鍋を囲んでのにぎやかな祝宴になり、自慢話に花が咲くのであつた。



「蝦夷地でのほうそうの話」上  
蝦夷地にはまだほうそうがなかったが、安永八年（一七七九）の秋、初めてマシケ（増毛）という所でほうそうが大流行し、これにかからない者はほとんどいないという状態で、死亡する者が大変多かつた。

ところが、イシカリの先ルモツベという村では、ただの一人もほうそうにかからなかつた。ここの乙名（おとな）

## アイヌの《ことわざ世間ばなし集》から

アイヌ部落の長（が）が村役人に相談した。「周りの村々にほうそうがはやってきていて、そのうちこの村にもやってくるだろう。そうなつては困るのうで、早く村の者を残らず山の中へ逃がしたい。」と相談したところ、彼は「山へ逃げても、食糧も準備しなければならぬし、もし一人でもほうそうにかかれれば介抱をするにも困る。ほかに工夫することはないか。」と言ひ、あることをその乙名に話した。

# 吉田一穂 と俳句

いま小樽市で『吉田一穂展』が開かれているが、私は一穂の「俳句詩論」なるものを見つけて書き写し、幾度も幾度も読んでみた。相変わらずナンカイな文章で閉口したが、読みまくってみて、「よくもまあ——、こんなに専門外の俳論まで勉強したものだ」と、つくづく今さらのように尊敬しました。特に芭蕉のことについては、

## 故郷を想ふ 福井孝平

まさに縦横無尽に切りまくったというところで、敬服するばかりです。

一穂は、傑出した詩人というだけではなく、絵や書にしても独特の才能を秘めていた人であったことがよくわかります。ここに多分気休めに——世間に発表するつもりもなく詠んだ俳句なのでしょうが、特異な鋭い感覚をうかがわせるようなものがあります。その中からいく

つかについて挙げてみたいと思います。ふるさとは波にうたるる  
月夜かな

この句は、厳島神社境内の詩碑「魚歌」に刻まれていてすでおなじみの句ですが、古平を故郷とする一穂の望郷の句として有名ですし、なんとなくわかり易い句です。大柄な句で、何しろ人間が大きいから句に圧倒されそうです。夜ふけて渡る鳥あり初時雨  
灯を消せば臥床に迫る虫の声  
落ち葉焚く三日月寺の夕炊ぎ

白菊や乏しき暮れの霜の庭  
木枯らしや妻子の留守の残り酒  
冬ごもり幾夜を月の雁の声  
薄明りこもる厨の酒の句  
隠れ沼を鳥の渡りに知られけり  
打ち水の夏のあはれや三日の月  
秋立ちぬ風鈴虫を誘はばや  
月天心乙女菩薩となりにけり  
片隅に吹きよせられし  
落葉かな  
雪もよひ藪かきさがす  
みそさざい

## 海神の魔説 伝

# 婦女禁制の神威岬

魔神伝説のくずれる日

また、当時の面白い風習として一つの話が伝わっている。神威岬より奥、石

狩辺りまでの場所では、時化の長引く時、アイヌが「女狩り」というのをやる。その理由は、暴風の吹き続くのは神の怒りをあらわすものであり、その原因は、和人の女が人目を忍んで神威岬を越えてきたことにあるから、これを探し出して追い出さなければならぬのだ。

これと似たようなことは、津軽や松前地方にもある。時化の続く時「丹後荒れ」と言って、丹後（京都府北部）人を探し出しては追い出すのである。蝦夷地の「女狩り」について

（上段より続く）

以上『ポエティカ』特集・吉田一穂 第五号より抜粋したもので、もう一人の一穂を発見した喜びでした。

なにしろすごい人だと思うばかり——。

は、蝦夷地についての本を多く書いている松浦武四郎の『再航蝦夷日誌』にある。

ところで、神威岬の神は長い間人びとから恐れられ、また敬われて日本海の一角にがんばってきたが、やがて時代は大きく変わろうとしていた。

今から二百年程前、幕府は当時ロシアの勢力が次第に蝦夷地に迫っていることを知り、その対策をたてなければならなかった。それでアイヌの人たちを手なづけたり、蝦夷地に移住させて人口を増やし、これで国境の取り締まりをさせることなどが考えられたが、どれもうまくいかなかった。それで幕府は蝦夷地を直轄にして箱館（函館）に奉行所を置き、奥州の各藩に警備を命じた。有名な間宮林蔵や最上徳内が蝦夷地や樺太などを探検、調査したのもこのころのことである。

さて、蝦夷地の警備を命じられた武士たちは、それぞれの地におもむくことになった。

古平青年会結成

古川 義雄

当時、町議であつた私は、青年会独自の集会場がほしくて、それさえあれば新しい展開ができると確信していた。そんな時新地分校の廃校が決まった。

ソレとばかり、青年会への無償払い下げを陳情した。同僚議員にも働きかけ「名を捨てて実をとるべき」といわれ、港婦人会と西部地区の町内会長も加えたことよつて、議会はスナナリと認めることになつた。

「青年会館」を夢見ていた分はこわれたが、別な構想もあるので仲間たちは納得してくれた。分校の頑丈な運動場の廃材は十分使える強度を持つていたので、それだけを使用することにし、ほかの教室分は全部ほしい人たちに入札させ、それで経費分を生み出した。

古盛座跡近くに、建設の槌音が聞こえ出したころ、突然、札幌から私に呼び出しがかかつてきた。更科源蔵先生の肝入りで新聞社入りが一つと、流行の最

先端をゆき、笑いが止まらない編み機の卸会社の常務・渡辺裕文先輩からであつた。双方とも一刻の猶予もくれないものであつた。

上山忠義会長、山野富生副会長を大急ぎで誕生させ、私は単身札幌に出た。

会館が出来上がったという知らせを受けてからも、私は多忙

石碑を訪ねる

「水を治める者は、国を治める」という古いことわざが中国にあります。これは黄河の水のことを言つたものですが、それとは比較にもならない古平川も、昔からよく洪水を起しました。昭和の時代に入つてからでも、毎年のように被害を与え、特に昭和五年八月十日のように、泥の木から鴨居木にかけて堤防が決壊した

古平川治水記念碑

建立・昭和三十年九月二十七日

古平町

古平川改修工事竣工式は、まれにみる秋晴れの九月二十八日、古平中学校前の堤防側で治水記念碑の除幕式と同時に行われました。「されば古平町はこの恩恵を永久に忘れることなく、ささやかながら石碑を建ててその徳を後世に伝えんとするものであります。」これは、伊藤町長の謝辞の中の一節です。

な札幌の暮らしのなかで、なかなか古平に帰つてきてそれを見る機会がなかった。数年後の夏、私はようやくその会館を訪れることが出来た。蝉しぐれのふる暑い日で、締め切つてムシムシする室内に酒ビンが数本転がっていた。「ゆうべ漁師たちの会合があつて」と、案内してくれた昔の仲間が、申し訳なさそうに説明してくれた。「古平青年会」の歴史が終わつていたことを私はいやでも知らされた。

(四ページ下段から続く)  
(注)この当時、カムチャッカや北千島などの北洋漁業を支えていたのは、北海道や東北からの出稼ぎだった。これらの人たちの出身地は、北海道五〇・一%、秋田一九・一%、青森一八%、岩手六・九%、新潟四・八%、その他(富山・石川・山形・宮城・福島など)が〇・六%で、北海道からの出稼ぎ漁夫が半数を占めていた。また北洋に出張した漁業会社の社員には、その苦勞に対する慰勞として役職者は海外旅行、一般社員には温泉旅行が待つていた。

——終り——

労働時間は規約の中ではあったが、実際は無いのと同じで、日の出から日没までというのもあったという。

一般の労働者の給与はどうかというところ、漁業の今までのしきりに従って給料(基本給料)のほかに割増給料・九一金・その他の手当があった。日魯漁業では日給制で、漁夫の平均日給は九十銭(昭和八、九年ころ)ぐらいであった。年の暮れの契約の時に半額まで、出港のときにまた半額を前貸ししてくれるので、正月や留守中の生活資金にすることができ、賃金の前貸制が一般であった。

だが、漁が終わっていったいいくら貰えるのかは、その時に分からないと分からなかったし、働きぐあいや漁模様でずいぶん差があり、もし賃金が下回ったりとすると、その分は返さなければならなかった。

こんなことから漁夫が、漁期

が終わってから期待するのは九一金であり、これは漁が良ければ賃金が追加されるもので、鮭百石について何円と決めて全員に支給された。この九一金は豊漁の時にはほぼ給料と同じぐら

今日日はこんな日

古平小学校新築落成  
近代的校舎に学校統合

[昭和39年]

建築以来五十六年を過ぎた校舎は、昭和三十二年、危険校舎としての指定を受けました。従ってこの校舎での教育は万全を期すことが出来ない状態になったので、三十四年、各方面からなる古平小学校建築専門委員会が設けられ、新校舎についての検討がなされました。

そして、校舎は鉄筋コンクリート建、体育館は鉄骨建とするこ

年功賞与・荷役手当などが支給されることもあった。カムチャッカでの労働はつらいもので、若い者でないとなかなかつとまらないが、それでも大勢が出稼ぎに行くのは、何と

いっても金になったからだ。七月初めになると、日本から野菜を積んで沖積船が来るが、漁場での食事は、みそ汁とご飯だけで、おかずは食べたければ各自で作って食べる。みそ汁の実は毎日決まったように、玉ねぎとじゃがいもだった。漁が予

とが決まり、三十五年から建設が始まりました。ちようどそのころから、全道で学校統合が市町村の大きな問題となっていました。新校舎は町内の学校統合をめざして、近代化に適應した校舎としての設備と美観に重点をおき、機能的な設計が考えられました。

三十五年九月二十九日、島藤建設工業(株)と契約をして着工し、

定の時間をこえて長引いたりすると、乾パンのようなものがくばられ、月に一回ぐらい汁粉が出た。船で沖泊まりをしているときは、そこで獲った魚を調理して食べることもできた。

漁場には、大幹部といわれる大船頭・親方(社員)・主任というのがいて、一般の漁夫とは番屋が別棟で、自分の部屋があり、食事も別であった。その下に中幹部である下船頭・起船頭がいたが、これらの幹部には分がついた。(三ページ下段へ)

三十九年八月三十一日に竣工しました。総坪数二千八百坪、総工費二億三千万七千円(工事費・付帯施設費を含めて)を要した新校舎は、児童の喜びと、町関係者や町民、父母の期待をこめて、九月九日に盛大な竣工式が行われました。

新校舎が出来たことにより、稲倉石小学校を除いた町内の小学校三校がこれを機に統合し、管内にさきがけて統合問題も一気に解決をみたのです。竣工当時、多くの話題を呼んだ校舎もそれから約三十年、そして、まもなく開校百二十年を迎えようとしているのです。